西南学院大学　人間科学論集　第 15 巻　第 2 号　　345 ― 358 頁　2020 年 2 月

幼児教育を学ぶ学生のための造形表現の教材について 2

黒　木　重　雄

Teaching Materials of the Art for Students Learning Preschool Education 2

Shigeo Kuroki

西南学院大学人間科学部児童教育学科の「造形基礎Ⅰ」の授業で扱っている教材を解説する。今回は、前号に続き第 8 回から第 14 回までを取り上げる。最終回の第 15 回の鑑賞会については、後日『AV 機器を用いた鑑賞会の実践（仮）』というタイトルで別考としたい。

第 8 回『ペープサートを作ろう（サンプル作り）』

ペープサートという聞きなれない単語を耳にしたのは、児童教育学科に着任したばかりの頃、20 年以上も前にさかのぼる。前任校は芸術学部だったし、長年、造形に携わってきたわけだから、まさか造形用語で聞いたこともないものがあろうとは思ってもみなかった。ところが、非常勤講師も助手もペープサート、ペープサートと言っている。「それって何ですか？」と訊く勇気がないまま会話に参加。どうやら、紙人形らしい。調べてみると、ペープサートは和製英語。正確には paper puppet theater（ペーパーパペットシアター）と言うらしい。

このペープサート、大学生には幼稚すぎると思い、授業で扱うなんて考えてもなかった。転機は岩井俊雄の『ようこそ先輩』。NHK の教育番組。番組の中で岩井俊雄氏が動く紙人形を紹介。その名はリベット君。作り方を伝授された小学生はリベット君作りに夢中。見ていて思った。おもしろいかも・・・。造形基礎の課題の中に動くおもちゃが加われば、授業内容に変化がつく。やってみるか。試作に取り掛かった。厚紙を切ってパーツを作ってみた。さて、どうやって繋ごうか。リベットを使うとなると、専用のペ

ンチが必要になる。できれば、もっと手軽なものにしたい。何か変わりになるものはないか。美術準備室の引き出しの中を探してみた。引き出しの中には前任者が集めたありとあらゆる材料が入っていた。割りピンがあった。これを使ってみよう。厚紙と厚紙を重ねて穴を開けて割りピンで繋いでみた。くねくね動かすことができるようになった。あれこれやっているうち、操り人形みたいに動かせればもっと面白いと思った。まずは、本体を割りばしに固定してストローも付けた。続いて、ストローに針金を通して可動部に接続。すると、割りばしを持って針金を引っ張ると対になった可動部が上下にシンクロして動く紙人形ができた。形は例えて言うならパタパタ天使。初めてのペープサート完成。

ワクワクした気持ちが冷めぬ間に、早速、教材として整えることにした。まずは、胴体の形を決める。受講生がある程度アレンジできるように、胴体は寸胴にした。こうしておけば、ふわりとしたワンピースにもできるし、切込みを入れてウエストをきゅっと絞ったスタイルにもできる。続いて羽根。割りピンを通す穴や針金を通す穴を開けなければならないので、羽根は大きめ。最後に頭。これは迷ったが、何も準備しないことにした。頭は、受講生が自由に作ったほうが面白い。

準備が整ったので、早速、授業でやってみた。受講生の反応は上々。自分の手で、動く紙人形が作れた喜びで教室には歓声が上がる。みんな思い思いに羽根を動かして遊んでいる。表情が明るい。これなら、もう一歩踏み込めるのではないかと思った。翌年からは、このペープサートはオリジナルを作る前の練習作とした。

配布プリント、材料・道具、授業の様子、作例は図①～④を参照。

第 9 回・第 10 回『ペープサートを作ろう』

練習のペープサートを作ることで、材料や道具の使い方や特性は理解できた。そこで、それらを応用してオリジナルのペープサートを作ってみよう、という流れにした。練習のペープサートが設計図も材料も整っているのに対して、オリジナルは設計図も無ければ材料も整っていない。全て自分で何とかしなければならない。当然ながら、オリジナルのペープサートを作るのは難しい。まずは、どんなペープサートを作るかで悩まなければならない。何を作ろうが自由。人間はマニュアルに沿うことは訓練されるが、マニュアルに沿わない、あるいはマニュアルの無い行動は訓練されない。“自由に”が重くのしかかる。しかし、これが美術の本質、避けてばかりいるわけにはいかない。そして、この難関をなんとか乗り切った受講生に次の問題が降りかかる。どうすれば思い通

りに動くのか？　ものづくりを経験してきた者でも試行錯誤が必要なところ。ましてや経験の殆どない受講生にそう簡単にできるわけがない。特に、動く仕組みともなれば、支点・力点・作用点といった要素が入ってきて頭の中がパンクしそうになる。そこで有効なのは、とりあえず試作をすること。思いついたものを見よう見まねで作ってみる。目で見て・・・触って・・・やってみて・・・修正して・・・を繰り返せば支点・力点・作用点などと難しいことは考えなくてもなんとかなったりする。が、それでもうまくいかない場合は、教師の出番。自分の経験から最善の方法を受講生に伝授する。

この課題が「造形基礎Ⅰ」の中で最も難易度が高いと思っている。その分、成功すればその喜びも一入。一人でも多くその喜びを味わってほしいのでできるだけ手助けはしないように心掛けている。その代わりにヒントになる資料を度々追加してきた。現在、配布しているのは「ペープサートを作ろう」「ペープサートを作ろう―動く仕組み―」「オリジナルペープサートを作る際のコツ」の３枚。

配布プリント、材料・道具、授業の様子、作例は図⑤～⑪を参照。

第 11 回『スパッタリング』

スパッタリングはモダンテクニックのひとつ。絵の具のついた歯ブラシを金網の上でこすって絵の具の飛沫で色痕を作る技法。中学生の頃だっただろうか、金網を手作りして、イチョウの葉をモチーフにした作品を作った。パソコンも何もない時代に、指先を一瞬離れて結ばれる画像にデジタルっぽさを感じて心ときめいた覚えがある。

さて、このスパッタリングだが、メジャーな教材の一つなので今更ここで説明する必要もない。ネットを覗けばいろいろな作例が挙げられているし、やり方も丁寧に解説されている。当授業でも、ここ 10 年くらいは課題として毎年扱ってきている。特に怠けているつもりはないのだが、気の利いた一捻りが思い浮かばないため一般的な内容に留まっている。あえて工夫したところを挙げるとするならば、昨年から金網と歯ブラシの代わりに小型の霧吹きを試しに用いたこと。絵の具も目詰まりの無い“彩液”なる液状のものを用いてみた。これにより作業効率は各段にアップした。が、絵の具の量の加減が出来なくなった。一長一短。来年はどちらでやるかで迷っている。もう一つ、紙も変えてみた。以前は画用紙を使っていたが、画用紙の上に載った絵の具の飛沫は、すぐには紙に浸み込まず乾燥もしないので、どうしても絵の具を引きずってしまうという失敗が頻発していた。そこで、試してみたのが和紙。和紙であれば絵の具の水分は瞬時に紙に吸い込まれるので、絵の具が引きずられることはない。これで失敗は激減。だがしか

し、こちらも良いことばかりではない。水分がすぐに吸収されるということは、絵の具の粒がつぶれるということ。つまりは、粒立ちの悪い鈍い色になってしまう。というわけで、紙についても画用紙にするか和紙にするかで迷っている。

材料・道具、授業の様子、作例は図⑫～⑮を参照。

第 12 回『コラージュ』

コラージュもモダンテクニックのひとつ。画面に写真や印刷物や布などを貼り付けて表現する技法。以前はテーマを設けてやっていたが、ここ最近は特に制限しないで教材にしている。

前号でも述べたが、ものを作ったり絵を描いたりする際は、決まり事が多ければ多いほど容易になる。例えば、材料や道具を制限したりテーマを設けたりすれば簡単になる。さて、このコラージュだが、既に材料や道具に大きな制限がある。印刷物を素材として使おうとすれば、色も形も大きさもその印刷物に委ねるしかない。作者が関われるのは選ぶという行為のみ。不自由この上ない。ということは、コラージュは案外簡単。これ以上、容易にする必要はない。よって、テーマは設けない。この容易さもあってか、学生はのりのりで制作。

授業では、不要になった雑誌を一人一冊持ち寄り、前年までに貯まった雑誌の山も加えて材料とする。まずは、自分のお気に入りを集めることからスタート。机の上はみるみるうちに素材の海になる。授業時間が半分を過ぎたころから、とっちらかった素材を集約する作業に入るよう促す。画用紙の上に、ある程度並べてみて、こんな感じかな・・・で糊付けする。その後も貼ったり剥がしたりを繰り返す。こちらからの声掛けは「目指せとびっきりの 1 ページ」のみ。授業が終了するころには、みんな満足げに作った作品をスマホでパシャ。とびっきりの 1 ページが完成したようだ。少し物足りなさを感じるのは、女子学生が、多いせいで雑誌がファッション誌に偏っているところ。科学雑誌や自動車雑誌などが加わるともっと面白い展開があると思うのだが・・・。

材料・道具、授業の様子、作例は図⑯～⑲を参照。

第 13 回『自分の顔、友達の顔、先生の顔』

とりわけ学生にとって苦手意識が強いのが、顔を描くという課題。小学校、中学校で上手く描けなかった経験があるのだろう。かく言う私も顔を描くのは苦手。なぜならば、顔を描くのは難しいからだ。何が難しいのかというと、ごまかしが効かないところ。

例えば、花や樹を描くのであれば、花弁が 1 枚足りなかろうが、枝の向きがちょっと曲がってようが、誰も咎めないし、気にもならない。しかし、顔の場合は、目や鼻や口が、少しでも歪んでいると、気になってしまう。この難問を解決するためには、ひたすら訓練するしかない。訓練してデッサン力を身につけなければ、顔をそれらしく描くことはできない。デッサン力の無い人に顔を描いてみて、というのは、ピアノが弾けない人に 1 曲弾いてみて、と言っているようなものだ。さて、教育現場ではどうだろう。母の日と言えば、お母さんの顔を描かされ、父の日と言えば、お父さんの顔を描かされる。さらに、小学校高学年や中学生になると、友達の顔まで描かされる始末。ごく稀に見様見真似でそれなりにデッサン力を身に付けた者もいるが、それは例外。ほとんどの児童生徒にデッサン力は無い。そんな彼ら彼女らに顔描きを強いるわけだから、結果はご存知の通り。お母さんは、オニンギョさんかスナカケババアになり、お父さんはコナキジジイになる。肉親ならまだいい、笑って許される。友達はどうだろう。妖怪や化け物みたいに描かれて嬉しいはずがない。描いた側にも描かれた側にも屈辱の 1 枚となる。苦い経験になることは想像に難くない。苦手意識を生むのにはそれなりの理由がある。

そんな苦手意識を持っている彼ら彼女らに、今一度、顔を描くという課題を課してみたい。当然ながら、一朝一夕にデッサン力を身に付ける方法など無いのだから、何の工夫も無いままに、顔を描かせたのでは、過去の苦い経験の二の舞になる。ならば、発想を変えてみようと思う。そもそも、人の顔は上手く描けない、から始めてはどうだろう。上手く描こうとするから難しくなるわけだから、誰がやっても上手く描けない状況を作ってやれば気楽に取り組めるのではないだろうか。早速、上手く描けない状況をいくつか試してみた。まず思いついたのは、利き腕じゃない方で描く。これは確かに誰もが苦戦して上手く描けないことが予測できる。が、しかし、利き腕じゃない方で描くのは、思い通りに描けないストレスばかりが強調され、全く楽しめない。続いて、目隠しして描く。これは面白いのだが、目隠ししてしまっては、顔どころか丸や三角を描くのだって怪しくなる。これでは意味がない。さらに続いて、見えない描画材で描くというのも試してみた。例えば、画用紙にロウソクで絵を描いてみると、ただ描いただけでは何が描かれているか解らないが、その上から墨を塗ると、ロウが墨をはじいて絵が浮かび上がる。これは面白い。実際に授業で試してみた。やってみると確かに描線が浮かび上がってくる様子に学生は興味津々なのだが、やはり見えない描画材で描くのは無理がある。見えないので追求ができない。しかも一旦墨を塗ってしまうと、それ以上は描き込めなくなるので、ここでの追及も不可能。顔を描くという課題にしては些か物足りな

い。というわけで、この方法は数回やっただけで継続するには至らなかった。そして、色々試した結果、一番良さそうなものとして、画用紙をビチャビチャに濡らした上に、墨汁で描くという方法が残った。想像できないかもしれないが、濡れた紙に墨汁をつけると、一瞬で放射状に5、6センチの滲みが走る。これでは、どんなに腕に覚えがあっても、まともに絵なんか描けたもんじゃない。何度やってもゴリラ顔になり、お手上げ状態。しかし、視点を変えれば、誰が描いても皆ゴリラ顔になるなんて、こんなに愉快な制作はない。受講生も楽しみながら顔を描くという体験ができるはず。実は、この方法には良いところがもうひとつある。それは、水分の蒸発とともに徐々に偶然から必然に変化していくところ。つまり、爆笑しながら楽しく描き始めたけれど、徐々に墨汁が滲まなくなっていき知らず知らずのうちにしっかりと顔を描く羽目になる。それでは、やっぱりデッサン力が問われることになるじゃないかと言われれば、それはその通りなのだが、ベースにゴリラ顔風の滲みがあるだけで、思いのほか魅力的な顔に仕上がる。この方法が最善だなどと言うつもりはないが、顔を描くことに対する苦手意識をほんの少しだけ払拭できるのではないかと思っている。

授業では、3つの顔を描く。自分の顔は鏡を見て描き、友達の顔は前に座った友達の顔を見て描き、先生の顔は写真を見て描く。この3点を同時進行する。机の上に3つとも並べておいて順番に加筆していく。3～4周も回しながら描いていけば、徐々に水分も蒸発しちょうど良い具合になる。

材料・道具、授業の様子、作例は図⑳～㉔を参照。

第14回『はじき絵』

幼稚園児の息子が、クレヨンで描いた絵の上に水で薄く溶いた絵の具を塗って「はじき絵、はじき絵」とはしゃいでいた。幼稚園では、はじき絵って言うんだ、と思った。というのも、モダンテクニックの技法書では同様の技法をバチックと称していて、私もそう言っていたからだ。そもそもバチックというのはロウケツ染めのことなので、授業で実際にやっていることとは違っているし、はじき絵の方がはるかに解りやすい呼び名だ。というわけで、今年から『はじき絵』と称した教材をやってみることにした。

はじき絵の原理を利用した教材として、以前は『昼から夜へ』と『スパイ大作戦』というものをやっていた。『昼から夜へ』は白画用紙にクレヨンで絵を描いて、その上に墨汁を刷毛で塗って背景を一気に昼（白）から夜（黒）へと変化させるというもの。『スパイ大作戦』は白画用紙の上にロウソクで絵を描いて、と言ってもロウソクで描いた絵

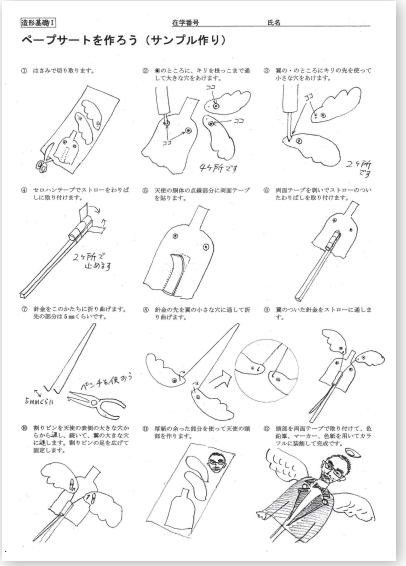
はほぼ透明なので何が描いてあるか解らない状態。この謎めいた画面の上に刷毛で墨汁を塗ると、図像が浮かび上がり謎が解けるというもの。どちらも面白い教材だったが、塗り色が墨汁の黒だけでは味気ないように感じたので、今年度は、赤、青、緑も加えることにした。というのも5歳の息子が幼稚園でやったはじき絵は、ど派手な電車の絵。その天真爛漫さを見習うことにした。なお、はじく側の描画材はクレヨンとロウソクのままとした。紙の大きさは8つ切りの4分の1にして、最少でも4枚以上はやってみることを課した。また『昼から夜へ』や『スパイ大作戦』などのテーマは設けず、単純に『はじき絵』とした。

受講生の反応は上々。はじき絵は誰もが経験しているものと思っていたが、半数ほどが未経験もしくは経験しても忘れているようで、その驚いている様に驚いた。さて、このはじき絵の技法だが、クレヨン画を魅力的にする方法として有効性が高いと思っている。未就学児および小学校低学年においては、白画用紙にクレヨンで絵を描くことが多いが、白画用紙とクレヨンは必ずしも相性が良くない。理由は、画用紙とクレヨン（白・黄を除く）との明度差。両者には大きな差が有り、塗り残しが目立ってしまう。その点、このはじき絵の技法を用いると、水彩絵の具が塗り残し部分に入り、画用紙とクレヨンの接続が格段に良くなる。クレヨンが水彩絵の具をはじく物理的な面白さに加え、なんだか自分の絵も魅力的になるわけだから使わない手はない。

今年度は初めてだったので手探りだったが、来年以降は画用紙をTシャツ型に切ったものを加えてみようと思う。お気に入りのTシャツをデザインしてみよう、なんていうのも面白いのではないだろうか。

材料・道具、授業の様子、作例は図㉕～㉘を参照。

西南学院大学人間科学部児童教育学科



図①『ペープサートを作ろう（サンプル作り）』配布プリント



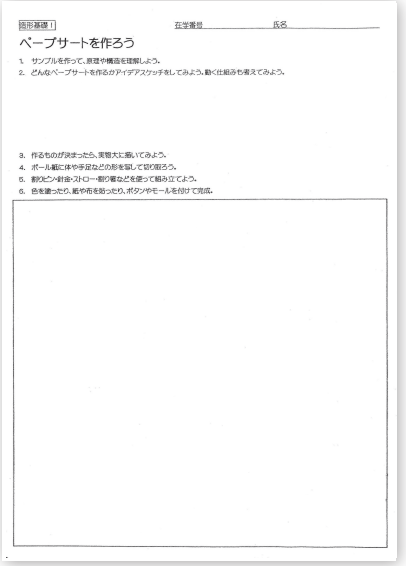
図②『ペープサートを作ろう（サンプル作り）』材料・道具



図③『ペープサートを作ろう（サンプル作り）』授業の様子



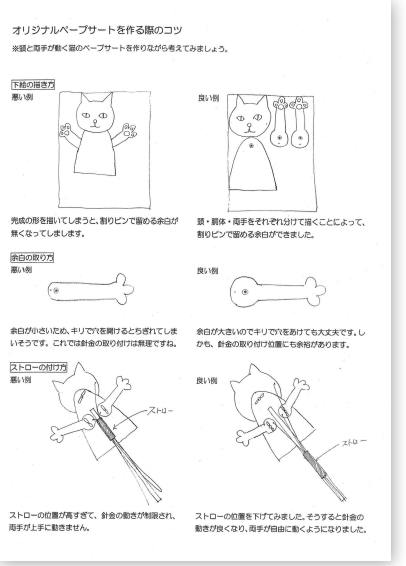
図④『ペープサートを作ろう（サンプル作り）』作例


造形基礎 I　在学番号　氏名

ペープサートを作ろう

1. サンプルを作って、原理や構造を理解しよう。
2. どんなペープサートを作るかアイデアスケッチをしてみよう。動く仕組みも考えてみよう。
3. 作るものが決まったら、実物大に描いてみよう。
4. ボール紙に体や手足などの形を写して切り取ろう。
5. 割ピン・針金・ストロー割り箸などを使って組み立てよう。
6. 色を塗ったり、紙や布を貼ったり、ボタンやモールを付けて完成。

図⑤『ペープサートを作ろう』
配布プリント 1


オリジナルペープサートを作る際のコツ

※頭と両手が動く猫のペープサートを作りながら考えてみましょう。

下絵の描き方

悪い例

完成の形を描いてしまうと、割りピンで留める余白が無くなってしまいます。

頭・胴体・両手をそれぞれ分けて描くことによって、割りピンで留める余白ができました。

余白の取り方

悪い例

余白が小さいため、キリで穴を開けるとちぎれてしまいそうです。これでは針金の取り付けは無理ですね。

余白が大きいのでキリで穴をあけても大丈夫です。しかも、針金の取り付け位置にも余裕があります。

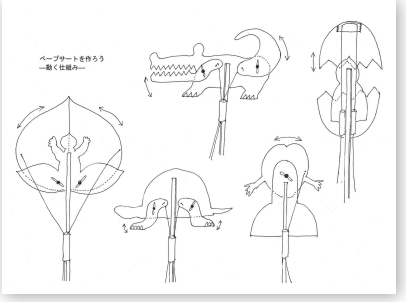
ストローの付け方

悪い例

ストローの位置が高すぎて、針金の動きが制限され、両手が上手に動きません。

ストローの位置を下げてみました。そうすると針金の動きが良くなり、両手が自由に動くようになりました。

図⑥『ペープサートを作ろう』
配布プリント 2



図⑦『ペープサートを作ろう』
配布プリント 3



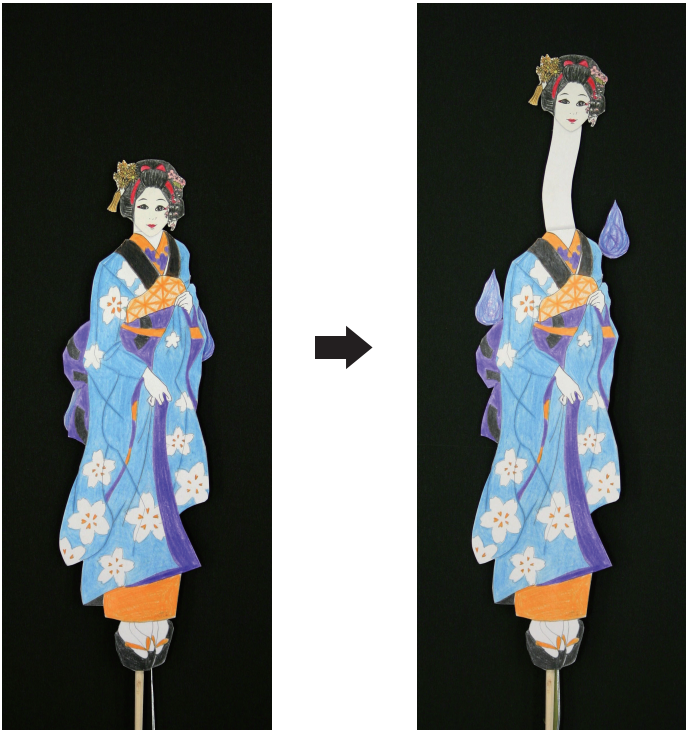
図⑧『ペープサートを作ろう』
材料・道具



図⑨『ペープサートを作ろう』
授業の様子 1



図⑩『ペープサートを作ろう』
授業の様子 2



図⑪『ペープサートを作ろう』作例



図⑫『スパッタリング』
材料・道具



図⑬『スパッタリング』
授業の様子



図⑭『スパッタリング』作例 1



図⑮『スパッタリング』作例 2



図⑯『コラージュ』材料・道具



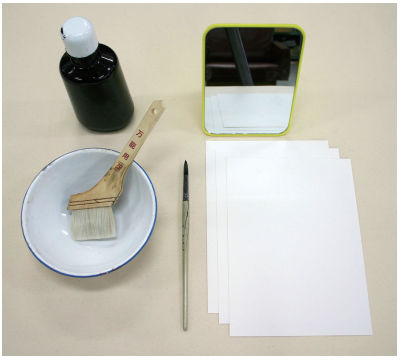
図⑰『コラージュ』授業の様子 1



図⑱『コラージュ』授業の様子 2



図⑲『コラージュ』作例



図⑳『自分の顔、友達の顔、先生の顔』
材料・道具



図㉑『自分の顔、友達の顔、先生の顔』
授業の様子



図㉒『自分の顔、友達の顔、先生の顔』
作例 1



図㉓『自分の顔、友達の顔、先生の顔』
作例 2



図㉔『自分の顔、友達の顔、先生の顔』
作例 3



図㉕『はじき絵』材料・道具



図㉖『はじき絵』授業の様子



図㉗『はじき絵』作例１



図㉘『はじき絵』作例２

※図④⑪⑭⑮⑲㉒㉓㉔㉗㉘の資料提供：江口梨花（児童教育学科）